異常な物価高騰を円安から考察する

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　東京国家公務員・独立行政法人労働組合共闘会議　　事務局長　植松隆行(元東京税関上席調査官)

**対前年同月比、19か月間も実質賃金が下落し、労働者・国民の生活は重大な事態にあります。この問題の原因を金融、財政、経済、労働のあらゆる面から追究し、それを正す政策要求をみんなの議論で作り上げることが、今まさに労働組合に求められているのではないでしょうか？今回私は円安の問題から考察してみました。**

異常な高騰が続く消費者物価

この2年間ほど、労働者・国民は「異常」な物価高騰に苦しめられています。

　私が「異常」という言葉をあえて使うのは、賃金の上昇をはるかに超える消費者物価の上昇が続く中、消費低迷が長期間続き、景気も一向に良くならないという、かつて日本社会が経験したことのない事態が長期にわたり進行しているからです。

　以下の表は総務省・統計局の統計資料に基づくものです。この表の通り、2023年10月は2020年平均を100とした場合、指数は107.1というすごい数値が示されています。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **〈表１〉　物価指数と対前年同月比較　　＊指数は2020年平均を100とする　　●電気代・ガス代の補助は、2023年1月使用分（2月検針分）から始まっています。従って2023年2月以降は物価指数が上がっていても対前年比較％では伸びは鈍化。補助によって物価上昇率は約1％程度下げているとの発表です。** | | | | | | | | | | | | | | | |
| **現数値　2022・2023年** | | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 |
| **総　合** | **指数** | 103.1 | 103.7 | 103.9 | 104.1 | 104.7 | 104.0 | 104.4 | 105.1 | 105.1 | 105.2 | 105.7 | 105.9 | 106.2 | 107.1 |
| **対前年同月比（％）** | 3.0 | 3.7 | 3.8 | 4.0 | 4.3 | 3.3 | 3.2 | 3.5 | 3.2 | 3.3 | 3.3 | 3.2 | 3.0 | 3.3 |
| **生鮮食品を除く総合　　　　　通常はこの数値で発表** | **指数** | 102.9 | 103.4 | 103.8 | 104.1 | 104.3 | 103.6 | 104.1 | 104.8 | 104.8 | 105.0 | 105.4 | 105.7 | 105.7 | 106.4 |
| **対前年同月比（％）** | 3.0 | 3.6 | 3.7 | 4.0 | 4.2 | 3.1 | 3.1 | 3.4 | 3.2 | 3.3 | 3.1 | 3.1 | 2.8 | 2.9 |
| **生鮮食品・エネルギーを除く総合** | **指数** | 101.1 | 101.7 | 102.0 | 102.1 | 102.2 | 102.6 | 103.2 | 104.0 | 104.3 | 104.4 | 104.9 | 105.2 | 105.4 | 105.8 |
| **対前年同月比（％）** | 1.8 | 2.5 | 2.8 | 3.0 | 3.2 | 3.5 | 3.8 | 4.1 | 4.3 | 4.2 | 4.3 | 4.3 | 4.2 | 4.0 |

　物価上昇はもう2年以上続いていて、**対前年同月比では26ヶ月連続して上昇、対前年同月比2%以上の上昇は19ヵ月連続です。　なお3%以上は9月時点で12ヶ月連続して続いていました。直近の統計数値、2023年10月は、2020年の物価平均を100とした場合、物価指数は107.1というすごい数値になっています。**

私はこの間たくさんの女性団体や消費者団体の皆さんの集まりで、物価問題をお話させていただいていますが、その中で「物価上昇が3％～4％というのは信じがたい。感覚的には10％の上昇」という発言をよく耳にします。直近の10月統計で、食料は対前年同月比8.6％の上昇ですから、毎日の買い物での感覚ではまさに10％と感じるのはよく理解できまます。

異常な物価高騰は円安と共にやってきた

　日銀発表の円ドル相場の推移をみますと、円安はここ2年の間に起きています。消費者物価の高騰もここ2年間に起きています。下表の円ドル相場の推移は、日銀が公表している東京外為市場での円ドル相場を抜粋したものです。円が異常に安くなり始めたのは、この2年の間に起きていることがよくわかります。それと並行して消費者物価も高騰していことは前述の通りです。

|  |  |
| --- | --- |
| **円ドル相場　(東京外為市場)**  **＝日銀発表**  **\*年初は9時時点　それ以外は終値** | |
| **2020年1月6日** | **107円98銭** |
| **2020年12月30日** | **103円33銭** |
| **2021年1月4日** | **103円25銭** |
| **2021年12月30日** | **115円12銭** |
| **2022年1月4日** | **115円34銭** |
| **2022年12月30日** | **132円14銭** |
| **2023年1月6日** | **134円25銭** |
| **2023年11月24日** | **149円56銭** |

下表右に記載した通り、企業間の取引物価では2020年を100とした場合、この10月は119.1という数値ですが、驚くべきは円ベースでの輸入物価です。輸入物価は10月はなんと166.5という指数です。つまり2020年には100円で輸入できたものが、先月は166.5円出さなければ輸入できなくなったわけです。

日本の貿易取引では輸入については７割がドルでの売買契約ですが、同じ１ドルでの売買契約でも2020年は103円程度で買えたものが今は150円というわけです。

**2023年10月の企業物価等に関わる指数（＝日銀公表）**

＊指数は2020年平均を100とした場合

❶企業物価　　１１９．１

❷輸入物価　　●円ベース166.5

　　　　　　　　　 ●契約通貨ベース129.3

**異常円安は「異次元金融緩和」が引き起こした**

ではなぜ円が安くなったのでしょう？直接的には日米の金利差です。コロナ規制の緩和と共に、アメリカでは景気が回復し、賃金も物価もどんどん上昇しました。

アメリカの連邦準備制度理事会（ＦＲＢ）は、過熱気味の景気とインフレを抑えるために、金利を引き上げる政策をとってきました。その結果日米の金利差は大きく拡大しました。そのために円を売ってドルを買う動きが活発化しました。通貨も他の商品と同じように、「需要と供給の関係」で相場が決定づけられます。「人気のある通貨」は買われ高値が付き、「人気のない通貨」は売られ安値が付きます。日本がアベノミクスで「ゼロ金利」が続く中ですから、アメリカの高い金利を求めてドルが買われるのは当たり前です。基本的にそれが今も続いているわけです。

**しかし私は今現在の円安は、日米の金利差だけではないと思っています。**結論的に言えば「円」に対する信頼＝日本の金融、財務、経済への信頼が著しく低下していることにあると思っています。金融は身動きの取れない「異次元緩和」と日銀の国債買いあさり(国債残高の50％が日銀所有)、財政は1千兆円をこえる借金、経済は相変わらずの低迷、そんな国の通貨は信頼できません。借金だらけの人物が振り出した手形など、誰も受け取らないでしょう。それと同じことです。

**円安の負のスパイラルからの脱却を！**

　今日の物価高から脱出するには、負のスパイラルから抜け出なくてはなりません。つまり「異次元金融緩和→ゼロ金利→円売りドル買い→円安→輸入物価高騰→

企業物価高騰→消費者物価高騰→消費不況→設備投資の低迷→賃金下落→経済不況」という最悪の循環からの離脱です。

　東京国公と官民共同行動実行委員会は経済・金融学者さん等の知恵も借りながら、経済政策要求もしっかり立てて、年末からも闘う決意です。各単組さん、組合員さんの大きな知恵を是非是非お寄せ下さい。